

巻頭言

第3号に寄せて

明星聖子

国際編集文献学研究センターは、2022年4月の設立から丸4年を迎えようとしている。本誌『編集文献学研究』も、今年度（2025年度）の本号で第3号となった（今年度は、9月に特集号も刊行している）。

本号での特集2つは、昨年度（2024年度）に当センターが主催した以下の学術イベントの成果である。

2024年6月15日（土）成城大学8号館008教室

シンポジウム「シェイクスピア戯曲編集のプラクシス—大修館シェイクスピア双書 第2集／第2期出版記念イベント」

2024年7月15日（月）成城大学9号館グローバルラウンジ

シンポジウム「哲学を手稿とアーカイヴの視点から見る」

特集以外の論文とインタビュー記事は、2023年度に開催した以下の講演会に関連するものである（当イベントの成果報告は前号の第2号に掲載した）。

2023年10月15日（日）成城大学3号館321教室

ハンス・ヴァルター・ガブラー氏講演「愛の復活、そのゆくえ—今、ガブラー版『ユリシーズ』の意義を語る」

ここで、本号の内容と関わることとして、当研究センターの最近の活動の特徴について言及しておきたい。

編集文献学をめぐる私たちの研究は、生成批評（Genetic Criticism）として知られる領域とオーバーラップし始めている。生成批評は、フランス国立科学研究センター（CNRS: Centre National de la Recherche Scientifique）の現代テキスト草稿研究所（ITEM: Institut des Textes et Manuscrits Modernes）を本拠地として、1970年代よりフランス文学研究者を中心に盛んに展開されてきた。

本号に研究報告を寄稿しているナタリー・フェラン氏は、そのITEMの現在の所長である。また、特集しているイベントの講演者ベネデッタ・ザッカレロ氏も、当研究所の研究員である。さらに書評で取り上げた生成批評の理論書の著者ダニエル・フェレール氏は、1994年から1998年、また2004年から2006年までITEMの所長を勤めた。

生成批評は近年急速にグローバル化の傾向を見せており、世界各地の研究者が集うGENESIS国際会議は、昨年（2025年）10月にヴィルニウス大学（リトアニア）で開催

された会で、第6回目となった。このGENESIS会議の参加者の大半は、ヨーロッパ編集文献学会(ESTS: The European Society for Textual Scholarship)にも所属している。私自身、第3回GENEIS会議とESTSの年次総会が2022年にオックスフォード大学でジョイント開催されたとき以来、双方の学会に毎年参加している。本号の内容には、こうした編集文献学と生成批評の近年の融合の状況が色濃く反映されているのである。

本年度私たちが開催した以下のイベントは、まさにその動向を問題として今後の展開を考えていくものである。基調講演者としてお招きしたのは、その流れの立役者、現在のESTSの学会長であり、第1回GENESIS会議をヘルシンキで主催したサカリ・カタヤマキ氏(フィンランド文学協会)である。

2025年12月21日(日) 成城大学9号館グローバルラウンジ

シンポジウム「編集文献学の地平を探る—生成批評と編集実践の対話」

今年度の活動実績としては、海外の研究センターとの連携の強化も挙げられる。2025年10月には、ドイツのシュトゥットガルト大学ハイパフォーマンスコンピューティングセンターと、12月には、ポーランドのヤギェウォ大学クリエイティブティリサーチセンターと研究協力に関する覚書(MOU)を締結した。

国際編集文献学研究センターは、国内外のさまざまな研究機関、研究者と協力しながら、今後も人文学研究の一層の発展に寄与していく所存である。